シンポジウムＣ　話題提供 ③

避難所になった学校、今だからやれる学校経営

佐々木 丈二（宮城県石巻市立湊小学校校長）

本校は、東日本大震災時に、校舎１階の天井まで津波による被害を受けた。学校に避難した児童、幼稚園児、地域住民等は、３日間、外部との連絡途絶に耐えた。職員はその間、避難者の世話と学校外で避難した児童の確認作業を行った。その後、市役所職員とボランティアに避難所運営を引き継ぎ、他の中学校を間借りして学習活動を再開している。

１. 何が起きていて、何が求められているか

◎**道徳性の再形成**　本校の学区は、震災後３ヶ月の間、ライフラインが途絶した。親族宅等に避難できなかった児童は、避難所となった学校や他の避難所において、支援されることに慣れてしまった。また、各種支援品の支給にも「当たり前」という思いが生じて、自助努力の気持ちや支援者や他者を敬愛することが少なくなっている。２学期以降、道徳性の再形成のため、より道徳の時間の学習を重視していく。

◎**心因的不安の解消**　保護者が住居・仕事先等を失ったストレスは大きく、結果として児童が受けるストレスも増大した。そのストレスが、学習活動の中で発散される場合がある。２学期以降、複数学年において複数担任制を取り入れている。

◎**地域学習**　生活科・社会科の地域学習では、本来、学習すべき地域とは異なる地域の学習をしている。その結果、自分が生まれ育った地域の良さを学習する機会を失っている。この問題の解消法はまだ見つからない。

２. 東日本大震災から学んだこと

◎**安全な学校・機能を失わない学校**　公立小中学校は、各地で地域の「拠り所」となっていることが多い。今回の震災では、学校が他地域に移転したり、地域そのものが消滅したところもある。これまでの経験上、地域の復旧・復興には、子どもの元気な声を地域に送り続けることが何より大切である。そのためにも、公立学校を地域から消滅させない工夫が必要になる。なお、特に海岸沿いの学校では、職員室・保健室や物資の保管場所を２階以上に設置することが望ましい。

◎**児童を支える教職員を支える**　児童と同じように、教職員も被災した。自己の生活の不安を抱えながら、児童への生活指導、きめ細かな生徒指導の要求への対応、災害対策での勤務時間の増加等で、教員が疲弊している。市教育委員会や校長会と相談しながら、今後の対応を考えていきたい。

―プロフィール―
佐々木 丈二（ささき・じょうじ）
宮城県公立小学校長（石巻市立湊小学校、石巻市立湊幼稚園長兼務）。1951 年、宮城県仙台市で生まれる。1975 年、宮城教育大学卒業、同県女川町にて公立小学校教員となる。以後 2001 年までの間に２回（６年間）、生涯学習の現場で勤務。2001 年、宮城県石巻教育事務所次長（生涯学習担当）。2004 年～、宮城県公立小学校長。2010 年現在、現在校校長、宮城県小学校長会理事。